繪本通俗三國志

東京圖書館
和書門
小說類
三六函
六架
七八號
七十冊

TOKIO LIBRARY

繪本通俗三國志初編卷之十

目録

明治十年交換

遷蛮輿曹操執政
呂布月夜奪徐州

遷洛金輿曹操秉政

去ちどる帝い虎口の難を御のがれあらせ。とどる洛陽の旧都へ入せ給ひぬ。董卓が都遷のさた。兵火の為に焼拂ひ。宮殿の跡は荊棘生て。月影ものすごく。墻壁くずれ。官省民家をなべて焼野の原となる。難人の聲多。犯兇の跡路よりまどろる。昔は替まるあり。さはるれが帝とも。侍衛の百官そぞろに涙となゞし。俄に皇居を構へ。帝と皇后とを入なり。百官朝賀い。高草の中に立。今年い乱逆國に起りて。日月静かるべくもなし。餓饉疫病打ちそれが公卿群議あり。

安と改元し洛陽の居民復ふ數百家ありて食ふべき物なく
くさびあるひは樹の皮と剥草の根と掘て命を繋ぎ朝廷の官人も
尚書郎すら仍下にくぐくし山に入て栗を採あるいは[illegible]りて世を
中ゐる太尉楊彪奏して曰ク勅を承て曹操今山東にあり兵十萬の勢を
[illegible]ひ遠近を靡けん勅使を立て都の内へまねきへ
賊徒を伐しめんやと申ス帝御許容あらるべし即附て山
東へ勅使を下さる是時に曹操は山東にあり天子洛陽へ
還幸ありぬと聞て紛糸るべと議るに荀彧申ス
昔晋の文公は周の襄王を納て國の諸侯皆従ひ漢の高
祖は義帝の為に縞素して天下を挙て逆

臣の為に襲ひ奪て塵と蒙むらせ給ふ將軍義兵を起しなふ
といへども山東の乱を治めよ官軍を率ひて洛陽へ
今洛陽に還幸なら皇居宮院をとぐくあまた扶
なる人もなし是を以て君を扶け人の望に従ふは天順
なり公道を仰ぎ天下を服せしむる大略なり仁義を扶け英
雄を用ゆる大德なり四方の國を平ぐ謀なり
と仰ぎ給ふ道に足んや曹操決
断して曰ク他の英雄は是に比べ侮るに足ず
やうに立ん人とて曹操に同じ用意を為
よと仰て兵を整へ天子勅使を立て詔を下げ召ん
れば頭を垂て幸ひ奏して兵を引て追ふに勉糸帝

い洛陽へ入せむひと。俄うのうちぶ。百事いまだ調のへず城郭の構も備ざるなり。李傕郭汜大軍を引て以来る沙汰ありと上と下へうそ[illegible]るまに帝いそぎ楊奉を召て宣ふ。賊軍又はのちに来きり。朕いぶくるる身をとりくさん使命山東へ行さいまだ敗らぬ。是虎と去て曹操が方へ落行ぬ。楊奉韓暹ら[illegible]と曰く。曹操とても如何る野心あらんもはかりがたくいへば。臣ねがはくは討て出さ。敵と防がん。董承ありて城郭の構もなく。仕へ[illegible]も多くは戦ふ[illegible]勝がたんぬ。いにしへの虎狼なる身と置んうちに人をつかはし来りて。賊軍とは近ぶきたり。何ぞ長く[illegible]き会議仕へふぞと呼りれぬ。董承が帝と皇后とを車に乗せ取ものも取あへず山東をさして走りぬる。侍衛の百官。ゐる歩跣にて相従ふ。ここに向より。馬煙おびただしくあらはれて。鼓の聲ひびくまで帝ふそれ煙きをみわたす。一人馬をさがしてと驀来り御車の前に再拝して帝らまきと見るふに山東へ行し勅使なれば。あまきるる大勢い何ものぞと問せるふに谷とやらん曹操勅と兼ねて山東と打立ていろに賊徒とをよ都とひらと聞て。まだ夏侯惇とともに先陣と。その外の猛将十余人五萬余騎をくえやらまきぐ参りて。帝大に仰ばひふに。ちぐらくありて。夏侯惇許褚曲蓋を先さと飛ぶごとく驀来御車にちかぢかとなる。甲冑を帯してひへ再拝をなりぐくに。ねがはくは軍禮を仰と見へ[illegible]。同音に

天子
楊奉

皇后
韓暹
帝楊奉韓暹を問て曹操をまねく

萬歳と呼。帝感じ給ふ。汝ホ鞍馬乃至弛。他日恩賞あらんと宣ひ給ふ。夏侯惇はもつて奏し給ふ。主人曹操大軍を調ふるはや。敵もや汝上りぬと兼ねおもふ。臣ホと先手をとして天子を守らむ。附は近臣走り来り東の方より一手の勢ひ来る。敵乃勢力はあらじやとおもふ。夏侯惇馬を蒐出して。そもいかに望こそ味方歩立の勢ひ来ると云ふ。れば帝御心を安んじ給ふ。附は近臣奏して曰く。只今乃勢ひは曹操が弟乃曹洪とぞ。李典樂進と副将とし。先陣をして打負ると見るやあらんとぞ。援の勢を差向と。帝ときこしめし。息ぜ曹洪と御前よめこれ曹将軍朕が社稷乃臣なりと宣ひ給ふ。曹洪頭首を退ぞく。

あり李傕郭汜が大軍。とどめ推よせなりと強だ。そもそも夏侯惇そもそもとどめ用意あるとて。歩立乃勢と後陣と。騎馬の勢と先陣とし。真地暗に討て蒐り給ふ。李傕郭汜が大軍ここの長途に疲れたる。あらじとぞ。十方に散乱しく。一支へもよつぐ。夏侯惇勝に乗て首を取と。一萬余級帝を守護し。洛陽乃故宮に入給ふ。兵いたのいろの城外に陣をとる。次の日曹操大軍を引て。洛陽に来り。精兵三千余騎と率して。自王居にいたり給ふ。近臣引て帝に見へ奉る。曹操階下に拝伏し給ふ。帝平身と賜て。曹操はしへと奏し給ふ。臣陛下乃洪福によりて。兵を山東に起し。ようやく勅命を承り。生涯乃面目報ぜん門也。今李傕

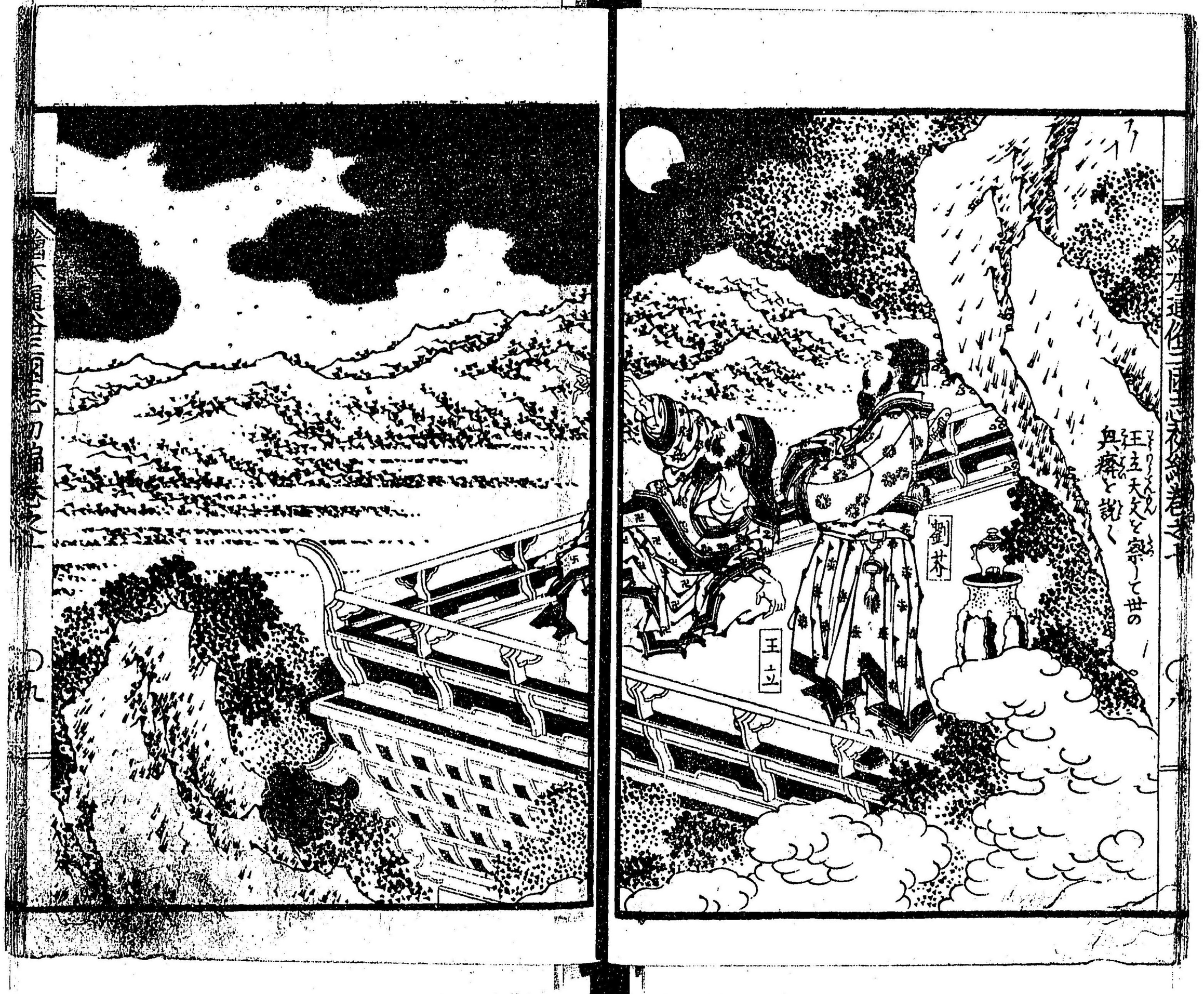
郭汜罪惡天に滿ちぬ。臣四十萬の精兵あり。順と逆と討なんぞ克ざるの理あらんや。陛下すべく寵倖を保ちて社稷と重しとす。時をうかがはざるべからず。平定を到さんとすれば帝も群臣も賴とす。思ひとる。即時に司隸校尉録尚書事に封じて節鉞を假す。曹操恩を謝して退ぞく。次の日五十里出て陣を取る。李傕郭汜是を聞曹操遠路を来りて疲れたるべし。人馬うるほひて疲れたるらん。ときに戰はんと議す。賈詡諫めていはく。曹操数十萬の勢ありて文官武將ども多くあり。不知孟德を卸ぎ倒しまはして降人に失ひ戰はずして敗きん。李傕大に怒り。你いうのまぶ不吉の言を出せるどとて。引出して斬んと仕るを。諸人ども一命を乞ひ扶けしかば。夜に入て行方をくらまして逃失せぬ。次の日李傕郭汜兵を出して出るを。曹操曹仁許褚典韋に精兵三百余騎を付て戰はしむ。李傕ぶ甥に李別大に怕れて許褚に一騎馬をとられて討人真先に馬を出して来るを曹操見て彼いかなるものぞと問へば。いまだ名のあらざりしかば。許褚ただ一刀に李別を斬て落す。李別大に怕れて許褚追ひかけて。真先に引落し。首をあげて扱切にすべくくと回りて追人さらに無りけり。曹操よろこびて褒ぜ許褚が背を撫で。當世の樊噲なりと感称して。又夏侯惇に向て。そなたの曹仁と右に備へ自ら鼓を打て。真先にとて進む。諸卒一気にとげまくて。さんざに戰へば其勢ひ傑然たり。

電光のごとくなりしに李傕郭汜大に乱れ忙しく家を失ふ犬のごとく急にして網を洩れる魚に似たりとせくと呼いまを
も。ゆゑに住まべき西とさしてゆきさきを落行く。曹操に賊
軍と退治し。討取る首と路次に斬梟す。洛陽の城外に
屯剏し。勢ひ甚さぐ大なりきぶ。ゆきを見て楊奉韓暹二
人。ひそかに議して曰く。今より曹操大なる功をなすべし。
権柄を専らにせん。ゆゑに我ホが前に拔群の功あるしも
賞せらるることあるべからず。ゆゑに落行ぎを追ひ来り。大
梁の陣を取。機を見て変じべしとて。手勢を引き出だす。帝
は曹操を宮中に召さる。勅使を陣中に遣はしまひらきぶ。
曹操出むかひ對面し。禮おわりて其人を見るに。眉目清秀な

しく。飄々たる神仙の気象あり。ひそかに思ひ。近年
ちはぐき饑饉して。官人も軍民も青ざめたる体なれば是人なり
り。精神純雅なる常の人にあらず。ゆゑに心根をも推量
と。妨げとなることもあらんかと。深く憎み御辺にいるる人なく
今勅使を来りあるのごと問ふ。答へていはく。何の功も
なくして。三十年ばかり徒らに君の禄をはむことをのみ。曹操
問ひて曰く。今いふる官職なる。答へて曰く。孝廉なりきぶ。
袁紹が従事なりしが。天子洛陽へ還幸なりぬと聞て。地上に朝
覲し。正議郎に封ぜらる。清雅定陶の董昭字は公仁といふ者
なり。曹操席を下りて敬まひ。常に御辺の大名を聞り
さひなる逢ことを得たりといふ。酒宴を設けて持て。荀彧が

とゝ召と。とゝもに天下の事を議とゝ。外より一人走り来り。たゞ今誰とゝもちらず。一手の勢。東をさして馬をとゝやゆと報ず。曹操とゝを追はとゝ生取来きを下知しゝる。董昭申しゝる。是は李傕の車馬と。楊奉と者と。白波帥の山賊の韓暹と。この二人なり。将軍の勢れ大なるを怕きと。大梁へ出れば。曹操ゝ曰。今外より出るゝ。董昭ゝ曰。とゝを出ゝ。この曹操ゝ曰。李傕郭汜一戦をゝぶれて落去り。そのまゝとゝとゝ。董昭ゝ曰。彼とゝを落と虎より凡るゝ鳥より翼あるゝ。久しゝ。将軍の為ゝ摘ゝ。あゝ道ゝ足んや。曹操その意對ゝ機ゝ応ずるを見て。

況ひとゝ。とゝを。朝廷の大事を問ん。今いゝる急務ゝ。董昭ゝ曰。将軍義兵を起と暴乱を誅。朝ゝ入ゝ天子を佐けゝ。その功五霸ゝ超たり。その外の諸将人異ゝ意別ゝ。いまだ是處ゝ留まりゝ。天子を佐けゝ。車の勢ゝ便を得ゝ。惟天子を許昌へ移と。都を建ゝ。行非常之事者必有非常之功。ゝ将軍軍業の大ゝ。行ゝ。曹操ゝ。董昭ゝ手と執と。とゝ。我ゝ。本ゝ志ゝ。楊奉。韓暹。大梁ゝ。朝廷の大臣。内外より討ゝ。とゝ。御辺ゝ。思ゝ。董昭ゝ。とゝ。書簡と送と。彼ゝ。


王立
劉芬
王立天文を察して世の異癖と説く

め。その後、奏聞と經ゞ今洛陽へ入くあきて。兵粮の用意ありがたし。まず川許昌より御幸をなし。官人百姓の餓を
とゝこらん。許昌は魯陽より近し。運送の便よしとゝ。群臣
誰か後ろ向ごとらん。曹操より後ろ向んぞ。御辺の
へ後ごらん。今より後も。よく後ゞ。ゝまをよくへ。ゝえうゝゞ厚く
報ゞべしと云。ゝまゞ董昭拝謝して。ゝまより曹操阿ゝ従
ゞの是ゞ侍中太史令。王立といふもの宗正劉芳に語て
トゝゝ。ゝまゝ天文を考ゝ。去年の春より。太白星とゞ。鎮
星と牛斗の間に。ゝ天津とゞ。災惑星逆行して。太
白星と天關に會して。金と火相まゝゝゝ。新
天子世に興る。今漢の運気と見て。天数とゞ益ゝ晋

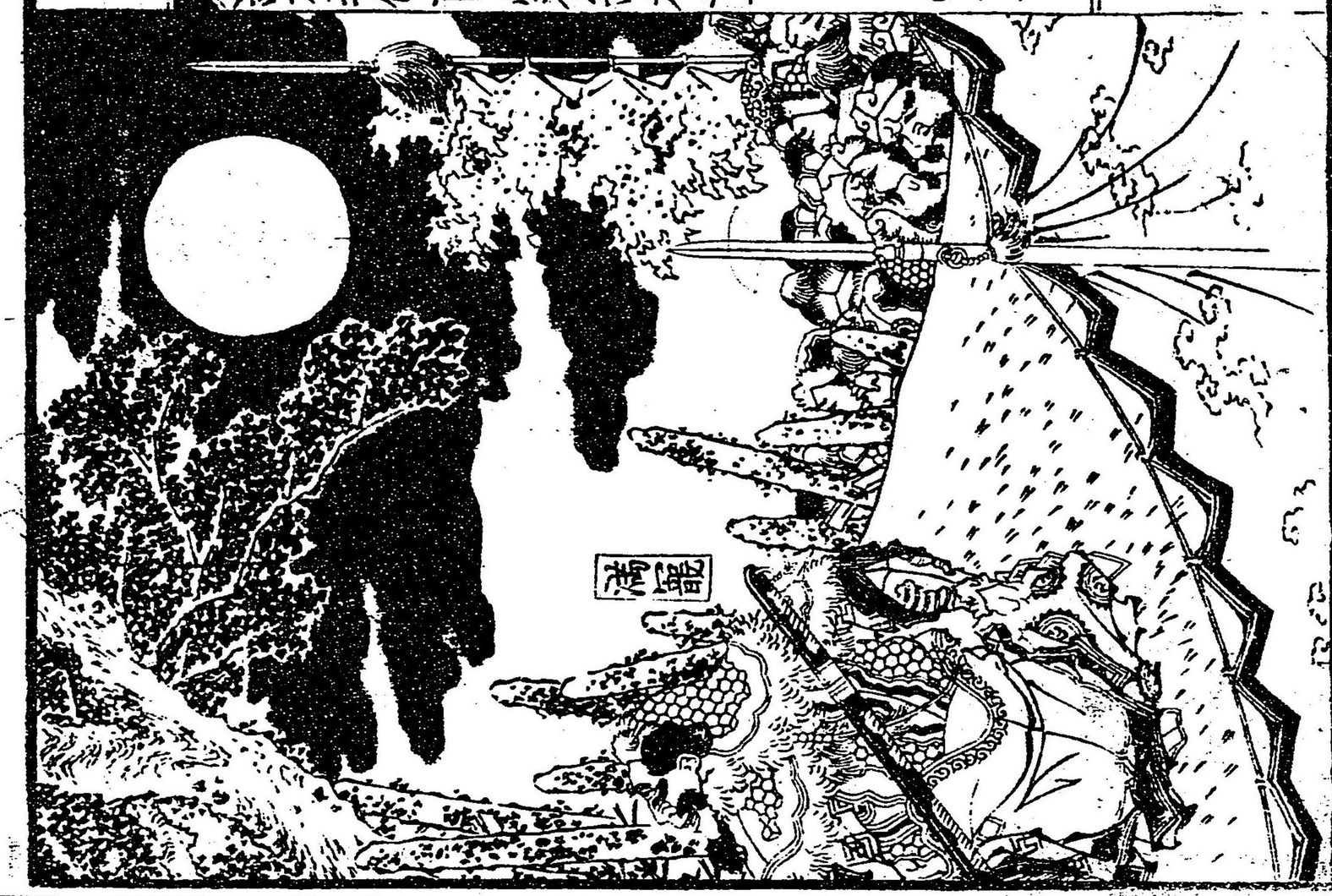
魏の間に。ゝゝゞ興るものあらんとゝ。ゝゝゝ天子に奏し
とゝゝ。天命去就あり。五行にねに盛ゝゞ。火は土と生し
ゝへ漢の火德に換りゝ。天下と兼ゝゝゝゞ。稲妻ゝゝ
んよく天下と安んぜゝゝゝゝ。曹姓の人ゝん。唯宜
く曹氏の人を用ゝ。政ごとを治めさせらるべしとゞ。曹操
のことを聞て。王立が方へ使を遣ゝとゝゝゝゝゝ御辺の
忠義を知ゝゝゝゝ。天道の理は深遠にして量りゝ。顔
ゝは是ゝゝゝ。ゝゝゝ外に沙汰しゝゝゝゝ。荀彧と召て語り
ゝまゝゝ荀彧ゝゝゝゝ漢朝劉氏の火德と仕て天下に王ゝゝ是
由ゝに両都ゝゝに興る。今将軍は土の性を受へり。許昌は
土に属ゝ。この地に行ゝゝゝゝ。ゝゝゝ興ゝん。火は土を生ゝ。土

いかゞと生ぞ。ちなみに董昭王立が上をはかる。他日うるさく王者興らんとこゝろまどつ曹日探いよ〳〵くんを決しで次の日帝よ見て奏聞し。洛陽い久しくさてきたりたるよ。皇子居の構えりぐこしたさて諸國運送の便あしくさ。人民飢ふ苦しむ臣たりよ許昌い魚鼈陽よ近くして城郭宮殿ちぐく備り民物盛めて富饒なり。鸞輿と遷しさ。御幸はをらんとしたまへ百官その威よ怕きさ。ちうべしとぞ同じる。曹操兼て用意しりしに鸞駕を備へさ。あぐく打立たるに洛陽とそうきたるよ深き林り陰す。喊り聲俄うあるりさ揚奉韓暹兵引き路を遮ぎり。徐晃と真先よとゝめさ。曹操正夫天子と却なしさ何くへ行とぐりるまぞ曹操大よ怒り許褚ゆき

らあまを討取と下知をる。許褚馬をとばしさ出るまを徐晃大よる斧をまはしさ五十余合戦えるに徐晃ぞ威風凛〻しるを見てんり内あぶなし金をるしさ軍を収め諸將とあはめとりるを。徐晃を見るよはことふ大將り才をり力と乃ちきとちなきよ思ひと。何ぞ奇妙る討を用ひと。味方乃大將をるぞ。願い足りといる。一人をを出さやるる。某もとより徐晃と一面乃交をりあり。今夜雑兵よまぞきを。彼ぶ陣よ行利害を説と降参せちん。諸人ちまを見まぞ。ちう山陽乃満寵字い伯寧る。曹操をるべしと許しまぞ。満寵ひをる。徐晃ぞ陣よまぞれ入を窺ひ見るよ。徐晃ぞ陣とも解ぞ。帳上よ坐しりしぞ前よをんさ長揖し。故人

恙あるやといふ。徐晃、屹と見て、ちがら思案しとやらん山陽の
満寵まいりたるを、合て曰、ちうり。徐晃、曰、今ちうふことまいる事ハ
まる。満寵が曰く、曹操、宛洲より、をとすれき用を。行軍、従軍
をと。今日、戦場、ちく御辺乃武芸とかやしあるを見て、甚で
をく存ちうへ。死とうりそどしさらく来きちう。ちうよとを去よ
少ある才とをを。楊奉、韓暹が輩ハ事へあるど曹操ハ一世乃
英雄漢乃天子と佐ち民とをちふ。今日乃軍ハ力を以て我
ひと決をちるよ。忍ひど。某ハ命ずと御辺をまわしむるを。
をとをを明あるよ。仕おいざる。徐晃、奮然として、嘆ずと曰く
ちをを楊奉ら並能ちるをを。相従ふて年久しいま
らをを。捨ちるよ。忍ひど。満寵が曰く、古へ乃詞ハ良禽ハ相

木而棲、賢臣、擇主而事、といえり。大夫の士、知と為ざるを、大
丈夫乃あらず。徐晃、席を起て、謝して曰、ねがくハ御辺の教へハ
従ふ。満寵が曰、をを。楊奉、韓暹が首を取て来りあつ。大ハ
功ちん。徐晃が曰く、日ハ主を頼んを。今ちををちうを大ハ
不義ちり。ちを是となさず。満寵が曰、御辺、いまハ有徳の
士ちり。去来、ををへ伴ちん。数十騎を引て出ちを。楊奉
ちをを聞て、追蒐ちて、其をを急ちり。ちをを四方ちり火を掛て。
曹操が伏勢、一度ちをり。楊奉を中ハ取ちを。さんぐハ汲
戦ちり。ちをを討ちをく見へちを。韓暹、一軍を引ちを出て。
ちををを残りをを討ちて。殆を被むちを多ちりしを。二
人をハ南陽を已と落行。袁術を恃んを居ちり。曹操ハ



保晃を得て大に喜び。御車を立やうとぞ。許都へいたり
きて宮殿宗廟を建て。司院衙門ホまぐ。一齊に備り董承等
を先として旧臣十三人を列侯に封じ。自ら大將軍武平侯の職を
受て。荀彧を侍中尚書令とし。荀攸を軍師とし。郭嘉を司馬
祭酒とし。劉曄を司空曹掾とし。毛玠任峻を典農中郎將催
督錢糧使とし。程昱を東平の相とし。范成董昭を洛陽の令
とし。満寵を許都の令とし。夏侯惇夏侯淵曹仁曹洪を將軍
とし。呂虔于禁樂進李典徐晃を校尉とし。許褚典韋を
都尉として内外の事をはからしむ。權柄ほしいまゝ曹操一人に帰
し。出入はねに鉄甲の精兵三百余騎を従ぐ。くり〳〵後の朝
廷次第にあらえて。故老の大臣もこゝに曹操が威を怖れて。

と天下の政をまゝ曹操に告て。その後に天子に奏して嗚呼不
定の世の中一人を除けば一人起る。漢家の運の衰たるこそは
ひとしき

呂布月夜奪徐州

曹操が威勢さかんに震て。朝廷の政をまゝ一人の料らひとなりぬ。
ある日大に酒宴をもよふして文武の大將をあつめ天下
の事を議とはかるに。今漢室を輔るべきを以て位をぞ三
公に登きりえんとて。徐ろに力ある人ぐんに直言するものぞ表
紹袁術二人ありといへども共に大國を領して勢ひ大なる輩
容易に図りがたしと。劉玄德ぞ徐州にありて太守たる。呂
布さきに山東を逃れて。玄德に身を寄て小沛の城に槍

たがふる。彼等二人もし。志ざしを合せて兵を起さバ由〻しき大事なり。諸将いかゞする計ありや。許褚すゝミ出て申しけるハ。某ねがハくハ五萬の勢を引て。玄徳呂布が首を取来らん。荀彧とゞめていふやう。御辺の武勇。まことに人に超たりといへども。近ごろ天子を許都へ遷して。人の心定まらざれバ。かるぐしく兵を起されハあるべからず。ここに一ツの計あり。二虎競食の計と号す。曹操が曰ねがふくハ聞ん。荀彧が曰たとへハ岩の下に食に飢たる二ツの虎あり。日夜往来して食を求む。ところに山の上より食物をなげ下さバ。かれ二ツの虎これをあらそひてたゝかひ一匹ハ死し一匹ハ傷はつかん。さるときハ容易く二ツの虎をとらへん。今玄徳徐州を保ちといへども。陶謙が譲を受たるのミにて。天子より

封ぜられたるにあらざれバ。勅使を遣ハして。まことの太守に封じ。又ひそかに書簡を送りて。呂布をうたせよと云遣ハさバ。玄徳よろこんで従ハん。玄徳もし呂布をうちはたさバ将軍又玄徳を討給ハんにかなふべし。玄徳もし呂布をうたずんバ。呂布かならず玄徳をおかさん。是すなハち二虎競食の計なりと申す。曹操大によろこび。即時に勅使を馳て玄徳を征東将軍宜城亭侯領豫州の牧に封じ。別に書簡をそへてぞ遣ハしける。是時玄徳ハ徐州にありて。曹操天子を徙して賊軍を破り。許昌に都を構へたりと聞て。使を馳て慶を述んと議しけるに。忽ちに勅使ありと報じけれバ。急ぎ出て是を迎へ。拝して勅命を承り。酒宴をもふけて持成しけるに

勅使又曹操が書簡を出し玄徳ひらき見あり。呂布とゝ為せとゝろとなりしゆゑ。勅使を譯館に留め置く。其夜諸将とあひはかり此事いかゞせんと議し。みな張飛が曰く。呂布人の恩を思はぬものゆゑ。曹操が命にまかせ首を刎ゑへ。玄徳乃曰く呂布頼むべき方なく。身を寄とゝろに来是をとゝろとゝ不義なり。張飛なほ益用ゆる義理なしゑへ。んとすれ。ゆゑ。後の禍と絶むへとゝろむきゑ。玄徳怒て坐を起ゑへ。次の日呂布自ら来て玄徳に見へ昨日天子より官位を送りゆゑ聞て。御慶をやとゝひけれ。張飛剣を拔てたしなり来る。玄徳急に推とゞめむへゞ呂布あゞ伏ひと曰く。ゆふゆへ。ゑをとゝろさんとする。張飛大音あげて曰く。曹操你が道を知ざるを乃ち。ゆゑ兄に命じて討とゝ伏ゑむ呂布が曰く。ゑを你と元より仇ゑ。何ぞ。くゝ情あき。玄徳叱て張飛を退ぞけ呂布を後堂に請じ。曹操が書簡を見せむへゞ呂布涙となゞして曰く。ゑを曹操が我ホ二人を怕ゑと。不和ゆゑん為乃計をなり。玄徳乃曰く。将軍ゑを安んじむへ五日ゆゑ浩ゑ不義乃ゆゑとせん。小沛の城に近ゞゑ兵粮を用意せしむ。将軍行て守りゑへ。呂布拜謝て出ゑゑゞ。玄徳門外に送りゑへ。張飛が曰く。今何ぞ。くゝ呂布をゆゑゞる。玄徳の曰く。ゆゑに曹操が討とゝ。ゑを呂布と一緒にゆゑゞ。くゝと合せと。事を起さんゆゑを畏ゑゑ。二人の間を不和ゆゑ。ゑをゆゑゞ。ゑをとゝろゑゑ。両雄不立といゆゑ計ゆゑ。関羽。ゑを聞

と。まことよ兄の言よくあてまりとえけまで張飛やりろん。まこと呂布をとらしと。後の患を絶んと存ぜるり。玄德の曰。まこと大丈夫のとるべきわざあらざ。你多言をとるまでもなく。自ら禪館へひと。勅使を見へ恩を謝まる表を上り。又曹操へ返書を送りと呂布が事い容易よい圖りがたしと。ちがうん時と待と討べしと答へ勅使回りと。其趣むきを告げまで曹操いを荀彧を召とりろん是駆馬呑狼の計と号く。曹操の曰いろん荀彧が曰ひとりよ袁術が方へ使を遣と。玄德いまま天子よ奏と。南陽と攻取んと請用心しむへと云遣アしむで袁術怒とるるで徐州へ攻ろらん。又玄德が方へ勅使を立と。天子の詔まり。ちゆく兵と立ん徐州人もとなりたまで。呂布をるで奪い取のんあらん是をるるち駆馬呑狼の計まり。曹操大よろこびまり袁術が方へ使を遣と。次よ勅使を徐州へ遣と玄德城を出くまとむうへ敕命を領と勅使とうしむへ糜竺謙をくりろん。まを也赤曹操が計とあらん君よ従あるれ玄德の曰らまを討と云ながら天子の勅命とりせば背ぐ兵をあしと南陽へ向べ。孫乾が曰く。君を打立あるく。後の用心第一まり徐州を守るものを残しむへ玄德の曰く。関羽張飛が内と人留めて守らしめん。関羽の曰く。某ねがうい守らん。玄德の曰く。你いまと朝夕事を議と。ちがらくもまれで

と南陽の袁術を伐と云遣ものと勅命黙止がたくしてまるで。うち立ん徐州人もとなりたまで。呂布をるで奪い取のんあらん是をるるち駆馬呑狼の計まり。曹操大よろこびまり袁術が方へ使を遣と。次よ勅使を徐州へ遣と玄德城を出くまとむうへ敕命を領と勅使とうしむへ糜竺謙をくりろん。まを也赤曹操が計とあらん君よ従あるれ玄德の曰らまを討と云ながら天子の勅命とりせば背ぐ兵をあしと南陽へ向べ。孫乾が曰く。君を打立あるく。後の用心第一まり徐州を守るものを残しむへ玄德の曰く。関羽張飛が内と人留めて守らしめん。関羽の曰く。某ねがうい守らん。玄德の曰く。你いまと朝夕事を議と。ちがらくもまれで

玄德呂布を後堂の請じて曹操の書簡を示す

張飛ときこえ出でて曰く。某ときは留まりて守らん。玄徳の曰く
你ときこえを守るとあるべし。本より酒を好む。醉ときは猥りに士卒
を打擲し。事ときは軽しくして人の諫めをも聽ぎ。すぐんつ
ねに安らぐべし。他の人を留むべし。張飛が曰く。某今より後ときは
酒を飲まず。又士卒を虐げんさは。人の諫めに従へん。
玄徳の曰。你をしんを以てすべし。ときは又ふたつの患とせん。糜
竺が曰く。張飛いまは口あるもいへども其違ふことを怕る。
張飛怒とりてときは兄に従ぐふ。年長。はじめに一度も信
となるべし。你いうときぶ猥りにときを軽んじときは。玄徳の曰。你が
性物に堪忍とあるべし。陳登を軍師とせよ。此人に問
へ事を行ふべし。酒を飲まときは。三萬余騎を引

と打立ちぬ。是附袁術は南陽にあり。勢ひ甚だ大きなり。
ときは勿忘すべし。曹操が使来たり劉玄徳天子を奏して南陽を
以取んとて御用あるべしと告ときは袁術甚だ怒り
曰く。玄徳は蓆を織屨を售たる匹夫なるぞ。猥りに徐州を領
して諸侯と同列ときは日ぶる奇怪思ひ合却て我
と以人を計るべきに行き踊ぶきとき。紀霊といふものは十
萬余騎を付き。徐州へ向いしむ去程に両方の軍勢忽ち
臨淮郡の所貽といふ郡まで行合。玄徳小勢なるぞ山に依
水に沿て陣を屯を。紀霊は本。山東の人にて。力人にときを。
重さ五十斤に造りたる三尖の大刀を使ひ馬を一陣に進む
ぞ。玄徳匹夫なるときを大国を侵すと呼びかれば。玄

徳大音あげて曰まく天子の詔を受順て乃ち逆を討。你早く頸を延て刀を受よ。紀霊大に怒り馬を乗て戦を討て荒まく関羽八十二合乃青龍刀を揮て出むく戦ふ三十余合紀霊ゑ大将荀正といふ者の馬を打て荒出れば関羽あざ笑ひて曰く。你何ものぞ。近ばひく首を失まんすと。紀霊を出せ。勝負せん荀正が曰く。你が名を聞なき下将なる紀霊将軍の對手なあらず。関羽きくもあへず直ちに馬を突て。只一合に荀正を斬て落を玄徳ゑまさに気を得て。三万余騎一度に喊を荒なりて紀霊大に乱まく淮陰を比て引退ぞ。河口に陣を取て。天軍に日を送る。徐州の城ゑ張飛守り乃大将をとよ。後に陳登を相議しまく。下吏乃

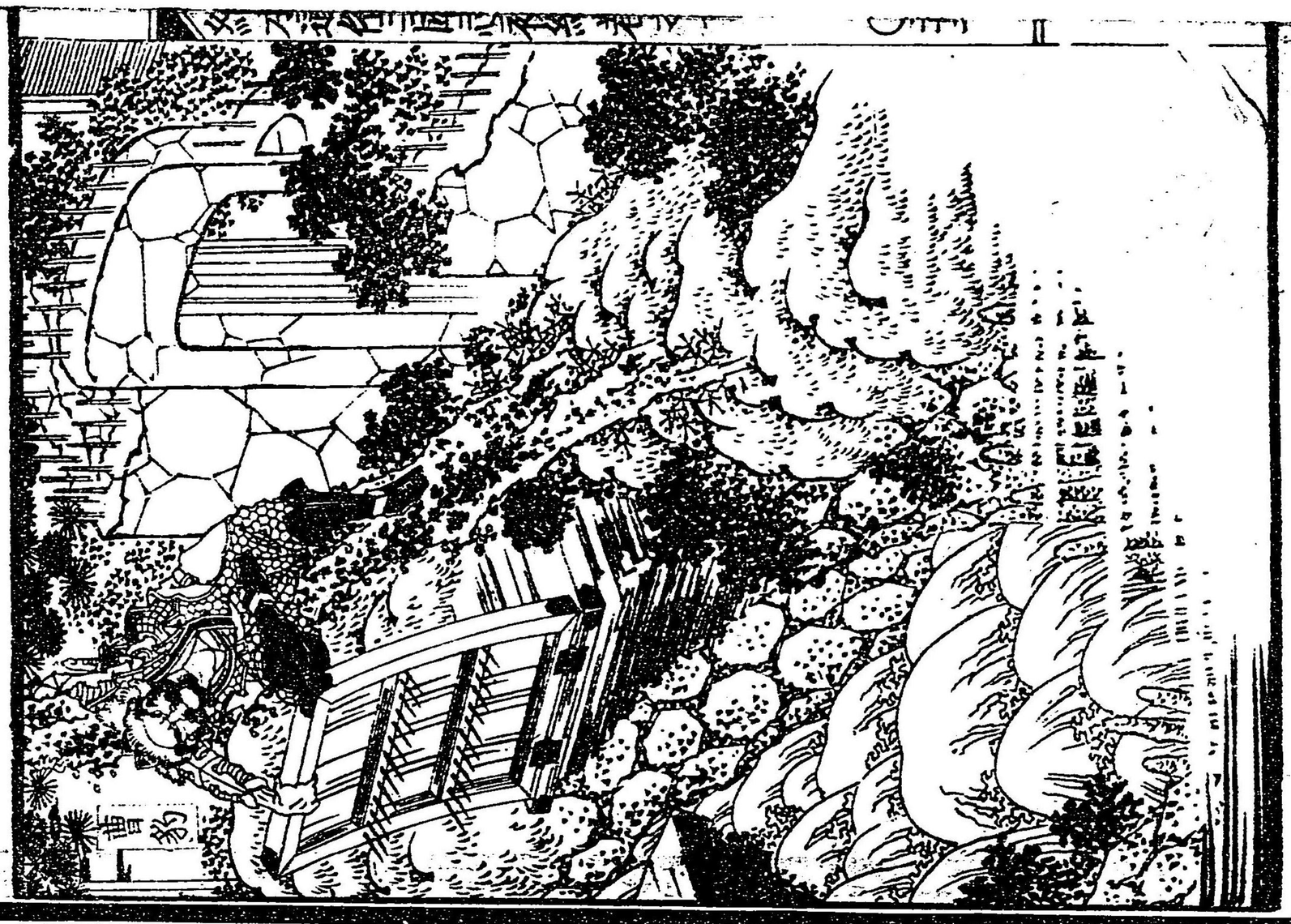
えのさを懐くんを思ひ酒宴をまうけて。とぐく主をあはまる兄乃打立ゑふを。因くまを戒しめて。此度の一大事乃守りを兼ゑ。とひゑへり。ゑまをも。此度の一大事乃守りを兼ゑ。今日だに酒を呑ぞ。諸人とんを合せて。よく城を守らんと。今日だに酒を呑ぞ。明日より固く一滴をも禁制をべしといふ。盃と取て一番じめ。又陶謙が大将なり。曹豹が前に置て。曹豹が玄徳の戒しめを聞ずして。某ハ天乃戒しめに従ひて。生に酒を呑ぞといふ。張飛大乃眼を怒らして。ゑまをる男ハ何を呑まじきとて。盃を呑をあらんぞ。我呑しめをよく知れといふ。曹豹ゑまを恐れて。盃を得ずして呑ぞ。張飛又盃を取て。曹豹

ぶ前ゑ立すり。ちやうに酒を強なりゑまぶ曹豹ゑ曰く。某きまらを
に呑ゑを得ぢ幸ゑゑゑ免しむへ張飛ら曰く。你も元来酒
と好む。今ゑゑゑへゑ呑ぢとゆぢを再三ゑなべども呑ゑゑ勧
然と怒と曰く。你ゑゑとくゑ大将ゑ下知ゑ背くぢとく棍と
持と曹豹が背を百杖ゑう。血いちぶれと泉ゑぢとくゑりれぶ。
陳登諫めと曰く。玄徳打立めぶ国ゑ戒しめむ。
やゑとれむへゑ張飛ゑなく怒りと。你へ文官ゑゑ何ぢ大
将ゑ事ゑあげらんとて又五十杖ぢ打たりゑる。曹豹退て
痛骨髄ゑへ深く張飛を恨ゑぶ其夜ひそゑゑ呂布が
方へ書簡と送りと。玄徳いま南陽ゑ出と。張飛一人徐州
を守ゑ。今夜大ゑ酒とゑぢと前後も知ぢ酔臥たり速ゑ

来と城と取むへゑを内ゑ門を開かんとひ遣はしゑぶ呂布
布ゑを見と。陳宮と議ゑる。陳宮ゑゑ。将軍此小沛
ゑ小城を守りと。いつまぢくゑ居ゑめべき。今ゑし徐州と
取むいぢ我ゑ何くへゑりゑも道を去ん早く打立めへと
と。赤兎馬を引出て鞍を備へゑぶ呂布戟を取て打乗
五百余騎ゑと打出ぶ陳宮高順大軍を引と後陣ゑ
ぢく。其路ゑぢゑゑ四十五里ゑれぶ。夜ゑ四更のゑゑ。
徐州の城下ゑいり。ゑとさら月の光も白日のごとくゑりゑ其
辺を伺ひ見ゑ用ゑの兵ゑの一人も見へぢ。扨ゑん安ゑと
と。呂布門の前ゑ馬と立劉使君ゑ急ありと使と弛ぶ。
やく門をあけらをひへと呼ゑりゑぶ曹豹かねと矢倉の間ゑ

あり。西へ門をひらひと入るる。呂布が大勢。さくさく打合。喊の
ときをあげ、ありをまぶ。俄に城中上を下へとくと。張飛なほ
いまだ醉と醒ざりし。人〻急よりあ。呂布ひそかに曹豹と内
通し。大勢をもぢ以入りと出るれば。張飛大に驚き。鎧
取と打ひけ。丈八の矛を提さげ。馬に打乗るとたちまち敵の
勢本陣に乱れ入る。張飛矛をまじ。やく〻戦ひ酒
いまだ醒ざしと。叫ひ〻思ひ。馬を打て走りる。呂布も張飛
が武勇。あるぞりくと思ひ。ぞを追うけざまぶ騎馬の大將
十八人。張飛を扶けて囲を出東の門を打やぶりと走りる。
曹豹ときとんと。百騎ばかりを率し。恨をとぶんさく追きたる。
張飛大に怒り。引うへと戦ひまぶ曹豹はじ。ひるまふべたなく

三合ばかと走りるぶ。河中まで追ひるを。逆に水中にて斬き
る。呂布が城中の軍民を安んじ。ぞを久〻玄徳の恩を受
いま是のごとい。いそ情あ紀振舞をとべきさく。士卒
百人を擇んで。玄徳の妻子を守らせ。環りに人を入れど。張
飛はぶ玄徳を十騎と引て。肝胎の陣にいり。玄徳に対へと
右の趣むきを語りまぶ。諸人ある色を失ふ。玄徳嘆じて
曰く。浮世のあひなまぶ得もよ紀ぶべ〻ぶ。失もるを囲むへら
ぶ。関羽問て曰く。兄の夫人はいかん。張飛答て曰く。事あまりに
急なり。西へ扶けて出すべき日間なく。城中にとあ紀う。玄徳
ときを聞て。黙然として居ひまぶ。関羽又やるる。你さるに
徐州をよく守らんと問く肯ひ。今城を奪ひ。且夫人をとと糟



討死をとるもあるべし。何の面目ありてか来りたるぞ。張飛恥しめらるる大なり。自ら剣を抜き首を刎んとせけるを玄徳急ぎ剣を奪ひ取て宣まひけるは古へ云ふあり兄弟は如手足妻子は如衣服衣服破時は尚更換るあり。手足とこそ若亡ぶべし。何ぞ再び続ぐ我ホ三人桃園の義を結んで同日に生るゝことを求ぶ。同日に死んと誓ひしに兄弟半途にして亡びんや呂布の妻子を捉へたりとも。ゆゑに殺すべし。われ既に計をめぐらさんとせしに聞人こゝに涙を流すなり。袁術は呂布が徐州を奪ひ取るすると聞き。いそぎ使を発して慶を述べ徐州の兵を起して玄徳が後を攻むべし。此方よりも攻さんぐ忠義

攻んとす。まづ兵糧五萬石。駿馬五百疋。金銀一萬両。段子千疋を献ぜんとす。呂布よろこんで従ひ高順を大将として五萬の勢を起し。玄徳の後を攻させる。玄徳是を聞て前後に大敵を受て叶はざるを知て夜の夜。ひそかに財貨を引拂ひ廣陵へ落ぬ。高順は五萬余騎をもて玄徳行方なく落ぬと聞て直ちに紀霊が陣へ行て玄徳を追落せ。約束の物を請取んといふに紀霊が是よりも袁術に告げ此方より送るべし。御辺は帰りぬ。ぬ帰りぬ。呂布は徐州へ帰り呂布を見て。右のすべを語る。こゝに袁術が方より書簡来りぬ。呂布ひらき見るに玄徳が廣

陵へ落ちゆく。そこらまで生捕るべし。其のまゝ約束の物と献ぜんと書かれし。夫人は怒り。袁術約束を背ひぐまを敗くべし。兵を起して破らんといふと陳宮諫めくれども。袁術は壽春城を守りて。勢ひ甚だ盛なり。後ぐしらは及ぶべからず。玄德を招いて。小沛の城を守らせ。其後時と伺うて。兵を起し。玄德と先手として袁術と平らげ。次いで袁紹を滅ぼしと。天下の内は縱横仕るべし。呂布もとよりよからぬ。急だ使を発して玄德をまねくべし。是ぞ玄德の廣陵へ落て。袁術と夜討せらるべき。残りとなるべし。呂布が使来て招きけれども。夫人は甘氏糜氏の。此間呂布が情あり。玄德の曰く。人をもて情ありとぞ。何の疑ふべからんと。徐州の男行は近付むべし。呂布其疑ひを散せん為なれば。夫人一族を送り回へ。是夫人は甘氏糜氏の。此間呂布が情あり。士卒を付て門を守らせ。時々贈物をなんぞ仕るべしと告らまゐれば。玄德の曰く。呂布は義を知ざる人なれば。你が疑を生ずるまゝとて。遂に城中へ入る。張飛呂布を殺せんと。ざりけるを呂布對面して。是困を奪はんとて。張飛酒をもてなして。猥りに人を去らせ。ちからく来て守るべし。玄德の曰く。是困を將軍に譲らんと欲す。らまゐるべき望むなり。呂布詐りて再三辞退し。酒宴を設けて持ぬ。小沛の城へ入れとしひけれども。玄德

出あふ関羽張飛よ[illegible]ばざる体なりとまこと玄徳の曰く。
身を屈て分を守り天乃時を待まもるべし保ホ[illegible]怒
[illegible]小沛の城を守りるか

繪本通俗三國志二編

近日出版

孫策大ハ太史慈と戰ふ[illegible]條ふ始[illegible]蜀魏の軍戰よかゝる
関羽張飛ちゝび諸の猛將數回の血戰智謀計議枚挙す
[illegible]皇ゐ[illegible]ず旦東武の勇士戴斗大人筆を揮ふく奇絶
玄妙の新畫と摸寫せ[illegible]ば四方の君子不日発兒の時と
俟[illegible]競[illegible]開巻ゆ[illegible]人喪と希ふ

書房 群玉堂敬白

皇都 池田東籬亭主人校正

東武 葛飾戴斗畫圖

淨書 浪速 内山蠖窟

彫工 京師 井上治兵衛

和漢
西洋 書籍賣捌處

大阪心齋橋博勞町角
群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

122
74
28

繪本通俗三國志

初編 一

122
74
28